

人文社会科学部 2 年

1.宮殿内ルール現在もクラトンにはジョクジャカルタ王朝のスルタン兼ジョグジャカルタ特別州知事であるハメンクブウォノ 10 世が居住している。そのため、クラトン内部には様々な制限が存在している。



- 規制線が張られ近づけないようになっている

- ・服装の指定王様に対する敬意を示すために、半ズボンやノースリーブが禁止になっている他、サンダースや日傘といったものも禁止となっている。

2.宮殿内部敷地全体が広場とは異なり砂敷きであり、ガイドや王宮に仕える従業員(abdi dalem)は裸足で歩いている。

Abdiの服装は上着は濃紺のベスカップ(beskap)という正装用ジャワ服を着用し、下半身はカインバティックと呼ばれる、クラトン独自の模様を用いたバティックを巻いている。

女性は上着も紺色のベスカップで、下半身はカインバティックと男性と共通しているが、髪型は伝統的なお団子ヘアをしている。



3.ドノプラトポ門

Kara

魔除けの飾りであり、建物の入り口に必ず飾られている。

王様のシンボル(プラジャチーナ)

ジョグジャカルタ王宮の権威と伝統を象徴する紋章。



ドゥワラパラ像

入り口を守護する、門番の役割を持つ石像であり二対で一体である。

4.王宮内部の建造物

・バングサル・マンダラサナ (Bangsal Mandalasana)

東屋であり、かつては伝統芸能のパフォーマンスが行われる場所であった。

オランダから輸入されているため、インドネシアとは異なった西洋的な作りが伺える一方で、ジャワ独自の模様も見られる。



・Bangsal Sri Manganti

かつては王室の賓客を迎えるために使われていたが 1993 年の地震により倒壊し、現在はガマランの楽器が配置され、ガマランの演奏によるワヤングレ、ワヤンクリ、ワヤンオランなど日替わりで行われている。



5.屋外展示

歴代の王様がコレクションした品物や使ったものがさまざまな場所で展示されている。

・ガルーダ(王様のお神輿)

正面にはワシの装飾がなされ主に結婚式で用いられる。20 人で担ぐ。

・ケントナン

音により、警報などの合図を送るインドネシアの伝統的な打楽器であり、ジョクジャカルタの街中でも見たのと同様のものだが、王宮内ではさらに巨大になり、音を響かせやすくなっている。



6.博物館内展示

王族が結婚式の際に着た衣装(パティック)や身につけた装飾品、今回見ることはできなかったが、7 代目の王様の家系図など、写真や実物を用いて、王族にゆかりのあるものを展示している。



・陶磁器

かつて王様の台所として用いられた建物内には、実際に使われたティーセットや収集もしくは献上されたティーセットが置かれている。展示の中には日本製のものもある。またオランダ、フランス、ドイツのティーカップには王様やその妻、子供の写真が載っている。



7.クラトンを含む 5 つの遺跡の直線軸メラピ山→トゥグ塔→北アルンアルン広場→クラトン→南アルンアルン広場→クラピヤツ→海岸はジャワに存在するヒンドゥー教とイスラムが融合して生まれた哲学と深く関わるものであり、それぞれが幼少期・青年期・成人期・老人期・死を象徴するものとなっている。

8.まとめ

クラトンとはジョクジャカルタ王国の歴史を象徴するものであり、インドネシアと合併した後も脈々と内部で歴史が続いていることが伺える。またクラトンに入る際のルールやクラトン内部で働く人の服装は全て、王族に敬意を表するために行なっているものであり、訪問者にも厳格なマナーを守らせることで、現代においても王家の威厳と文化を守るために欠かせない要素になっていると考えられる。